

全国大学書道学会 会報

4

平成18年（2006）
3月31日発行
全国大学書道学会

平成十七年度

全国大学書道学会千葉大会 報告

千葉大学 浦野 俊則

平成十七年九月二十一日、千葉大学教育学部において本年度の総会及び研究発表大会が開催された。また、当学会会員による書作展が二十一日から二十三日に同学部内で開かれた。

総会も研究発表会もほぼ予定通りに進行できたことは、学会役員諸氏の努力と会員の協力によるものであり、感謝している。

今大会で記念講演を開催校が決めるのではなく、学会に主導的に進めていただいた。この点が従来と変わった点である。

学会開催にとって何より大切なことは、研究発表が充分かつ活発に行われる環境を提供することである。開催校としては、例年より日程が早まったことで、参加者数が減らないかという不安があった。事前の参加申し込みは、半数程度しかなく、心配していた。結果は、例年通りの参加人数があつて安心したが、会員には返信用はがきで返事することくらいは、きちんと対応してほしい。受け付け態勢が、当日の参加申し込み処理をするために、申し込みを済ませてあ

る人の二倍以上必要だった。急遽、態勢を組み替えて対応したが、それでも受け付け待ちの行列ができ、大会開始時間に食い込んでしまった。開催校として反省しているが、会員にも協力をお願いしたい。本年度の大会は、全て学内施設で行った。古びた施設で使い勝手がいとは言いがたいが、学生の協力を得やすく経済的にできるという利点がある。開催校としては、この二点が重要な要素である。



会員書作展会場風景



平川 南先生 記念講演「出土文字を観る」

九月に開催したというのも、学校の施設を利用することから決めたものである。開催校の都合のよいように運んだと言われるであろうが、専任教員が一人しかない大学が学会開催を引き受けるには、それなりの工夫が必要だったということで許していただきたい。



第一会場で発表を聴く参加者



総会



会場入口



会員書作展



研究発表風景



香川松石研究業績陳列

【記念講演概要】

千葉大会では、日本の古代文字に関する第一人者である人間文化研究機構理事、兼国立歴史民俗博物館教授の平川南先生に講演をしていただいたので、その概要を紹介したい。

(紀要編集担当 鶴田一雄)

「出土文字を観る」

平川 南

紙に書いて提出された文書もあるが、中国のように竹簡は幅1cm程で、広い木簡の場合、私が仮に線を入れると1・8cmで三本になる。文章の罫線も例えば、正倉院文書は1・8cm、界線の中には2cmのものもあり、木に書かれたものが紙に転記されるようになった。廃棄文章については、木を廃棄する場合は、通常捨てて、木簡は削られる。重要な宛先、郷長と里姓の間で切る。切り方で郷長が重要であったことが解る。

現代は情報化時代で、木簡がデータベース化され、釈文に起こす作業を行っているが、考古資料としては、現場に戻ることが大事である。出土資料の形状、材質を考察する時、中国、朝鮮を見て考える必要がある。

栃木県小松原遺跡出土の「鏡」字は、馬屋の「厩」と積されていたが、「鏡」と解されるようになった。「𠂔(得)」、「𠂔(万得)」は日本列島で出土する墨書土器によく見られるが、一文字ではなく、合わせ文字である。八千代市上谷遺跡から出土した資料については、古代の人が自分の願いを土器に託している。閻魔様が冥界に連れて行くことを除かれる。それについては、『日本霊異記』に見られる。閻魔様の隣には紙・墨があり古籍もある。沙婆(現世)でどのような行いをしたか、御馳走を捧げて、閻魔様が口にしたら許される。

延命行為が墨書土器に書かれ、それは信仰である。則天文字はご承知だと思えますので省略します。郡符木簡(屋代遺跡出土)は、紙と木が併用されていた。紙と木との関係は、行き来するように木を一年間綴り合わせ、紙に転記した。稲を某々に借し与え、中央に山形を書いた。

次に、古代の日本の文字に習熟しているという大きな問題について考えたい。七世紀後半から八世紀の律令国家では、中央から文章がもたらされる。則ち国から郡、郡から里に命令が下る。そこで「郡府木簡」が目目される。新潟県の八幡林木簡がそれである。村社会では文字によって示されている。郡から里に命令を示す命令書

は、紙ではなく木簡である。通常では、福島県・矢玉遺跡出土のものは三・二cm、紙は横二尺、縦一尺である。郡から里に示すのは、木簡は二尺で、文字は大きい。「府春」は実物大で、正倉院文書の大きさと比べると、いかに大きいことがわかる。大きな木簡には「召喚状」があり、目的は役人が掲げておいて、「今日何時までに出仕せよ」というもので、この形式は中国になく、日本独自のものである。都では人が行き来する所には、告知する「告知住還諸人走失黒鹿毛牡馬」などである。長岡京では不明になった子について、立て札、木簡によって人に知らせる。それによって人が協力する。村の告知札には「諸田刀祢等に告知する」(鹿兒島県京田遺跡)とある。これは田を没収したことを知らせるために畔に突き刺した。現代の裁判所の掲示と似ており、畔に突き刺しただけで有効になる。ここに都と村が熟していることの違いを示している。

高度成長期から出土する土器から習熟していた。竈穴住宅から出土する土器に見られるが、解釈が異なる。文字は地域差がない。草書を楷書で書き、目で見えて書く。それは千葉県が最も多い。墨書土器は七、八世紀で、印旛沼水系と称されるものがある。鹿兒島から青森、北海道まで出土しており、字の形も似ている。「井」は、以前は井戸の祭りと解されていたが、伊勢志摩の海女の磯ノミに印された「井」(クジ)、陰陽、魔よけの記号で、「小田万呂」と「井」が一緒に書かれる。



木に書くといくことは、木の特性を活かしている。中国では竹簡や木簡があり、紙に移るが、日本でも同様に併用されている。四面に書くことと皆が見ることが出来た。では当時の書体を見てみたい。「部」は人名に使用されるが、七世紀代では「酒人ア」(片仮名の「ア」に近い)で、直すぐに伸ばす。この特徴は朝鮮半島の城山山城木簡に見られる。「ア」から「マ」部に注目すると、七世紀は「マ」、八世紀には「ア」に作る。八世紀から九世紀の全国各地の資料は「マ」に見え、時代を判別する時の基準になる。「節」は旁を極端に

下げ、「平壤成壁石刻」（五八九年）にあり、「阿」は「船主後墓誌」にあり、出土資料の判別資料である。土器の文字は合わせ文字で、省画でこのような文字が生まれた。墨書土器にはよく見られる。福島県猫田遺跡の文字は、新羅音に統一される。出土も字の意義は大きい。『日本書記』などは編纂資料であるが、出土文字を見ると、「西河原森ノ内遺跡出土木簡」には、七世紀の日本では「舟人を率いて」となり、漢文では「率舟人」となるが、これは日本語化されている。土器に書いた八世紀の埼玉・鳩山町広町出土の土器には「此壺使う人は億万富貴と曰う事なり」という表記になっている。漢字を使って日本語表記になっている。当時の人が中国の文献によって学んだものである。『論語』、『文選』、『千字文』などを多くの人が学んでいたことが資料から認められる。例えば、徳島の観音寺遺跡出土の四面体の杭に「論語」の「学而時習之、不亦説乎」という学而篇の最初が書かれている。都を除いた最も古いもので、七世紀に書かれた。韓国釜山のオウドウ遺跡から『論語』公治長篇を四面体に書いたものが出土している。実際は一二〇cmあり、教室のような所で、面を回しながら声をあげて学んだと思われる。

朝鮮半島の木簡

私は近年、韓国で日本の木簡のルーツを探る上で、中国からだけでなく、朝鮮半島を経由してくる木簡に注目している。韓国から出土した木簡を直接見る機会を与えられ、二百点近い木簡を見ることが出来た。日本の古代の木簡の発見は約十七万点と言われる。そのため日本の研究者は、日本の古代木簡には注目するが、韓国の木簡には興味を示さない。百済、新羅の木簡は、日本の木簡に先行しており、その影響は明らかである。日本の木簡は七世紀後半であるのに対し、朝鮮半島では、百済の芙蓉、釜山の「城山山城木簡」が六世紀で五世紀には文字が使われていた。稲荷山鉄剣、千葉の鉄は、その間を埋める資料である。韓国の「城山山城木簡」は、七世紀の石神遺跡の「済」というのと全く同じで、中国の「李柏文書」と共通している。六世紀の百済の文字は、七世紀前半の法隆寺台座墨書、七世紀前半から後半と見られる難波宮木簡がある。形状的には城山山城の木簡は、付け札で下に切り込みをつけている。日本では何万点も出土する中で、その殆どが上部にあり、下部にあるのは十点足らずで、珍しいタイプである。漢方薬の「信州大黃」は名産品で、藤原京で栽培されていた。「尼雅音簡」（二世紀後半）など中国から朝鮮へ伝わってきて、切り込みが上になったものと思われる。

知識層は渡来人で、木簡から実態が解る。八世紀や七世紀の字書木簡がある。「態」

という字の下に「ウゴ」とか、「ウケ」（恐らくこちらが良い）は、漢音では「エウ」というが、朝鮮半島では「ウケ」となる。態（シン）は、朝鮮半島の音が日本に伝わったもので、皮伊（ハイシ）も漢音とは合わない。八世紀の遣唐使以後、漢音となるが、それ以前の音が木簡から読み取れる。

私が力を入れているのは、古代の遺跡から出土する文物について、見ることの大切さを伝えていきたい。私は古代史を研究しており、東北の古代支配者の多賀城遺跡を発掘調査した。そこは行政府で、多賀城に各地から送られてきた紙（文章）の中で、漆紙文章と称し、漆の蓋をするのに文章が使われ、好運にも千二百年間残っていた。紙は、中国の東北部の乾燥した状態では残るが、日本の高温多湿の所では残らない。奈良の正倉院のような条件でしか見ることは出来なかった。或いは土器に書かれた文字や木簡などは、昭和三十年代以降に文字を解説して歴史を垣間見ることが出来るようになった。

次に空海の資料を紹介したい。空海は讃岐の多度郡の出身で、文献に依ると「方田」になっているが、大政官符、大同五年（八〇八）に依ると「片田郷」になっているのは明らかである。『和名類聚抄』には「弘田郷」になっており、十二世紀の資料では「弘田」になっている。資料に示す「弘仁六年」の「弓」偏を「方」の様な形に書いている。従来の説では「弘田郷」を「片田」としている。最近、飛鳥の石神遺跡から出土した「石神遺跡出土木簡」に「多土評難田門」（たどのこおりはたもん）、「海マ刀良」、「左匹マ足奈」とある。空海の俗名は佐伯氏、片田には佐伯氏がいたことが木簡によって証明される。「左匹マ」が「サヒキ」、「サイキ」に通じた。音による文字を問わないというのが古代文字の特徴である。七世紀に存在したのは、「弘田氏」から「片田」ではなく元々「片田郷」であった。九世紀前半の資料も「片田」で、「弘田」は十世紀以後に見られる。偏の略として書いたことは成り立たないことが木簡の出土で明らかになった。

空海が亡くなったのは八三五年で、延喜三年（九二二）に弘法大師という師号を賜うが、当時から片田郷は知られ、空海の生まれた片田を弘法大師の「弘」に改変したのではないだろうか。片田郷が本貫の地とされるのが、このように一つの資料で見直すことが出来る。

文章を見ると、目、耳、口が重要である。一つは目で覚える。八世紀の瓦などには工人達の名が出てくる。次は耳で、漢字の音が合えば、意味は問わない。さらに口で伝達する。郡府木管などがそれである。それを想定して古代文字を見ていく必要がある。我々は忠実に伝えることが使命であり、新しい世界を展開して欲しい。

平成17年度 全国大学書道学会 千葉大会 次第

- 1) 主 催 全国大学書道学会
 2) 開催大学 千葉大学教育学部
 3) 日 時 平成17年9月21日 (水)
 4) 会 場 千葉大学教育学部 〒263-8522 千葉市稲毛区弥生町 1-33
 5) 参 加 費 4,000円
 6) 日 程 (予定)

次 第

9:00～9:30 受 付

9:30～10:00 開会式・総会

- | | |
|--------------------|--------------------|
| 1、開会の言葉 | 野中 浩俊 (新潟大学) |
| 2、会場校挨拶 | 浦野 俊則 (千葉大学) |
| 3、会長挨拶 | 小木 良一 (東京学芸大学名誉教授) |
| 議長選出 | 議長 平形 精一 (静岡大学) |
| 4、議事 | |
| 1) 平成16年度事業報告 | 青山 浩之 (横浜国立大学) |
| 2) 平成16年度決算報告 | 青山 浩之 (横浜国立大学) |
| 3) 平成16年度会計監査報告 | 前田舜次郎 (元跡見学園女子大学) |
| 4) 平成17年度事業計画案 | 青山 浩之 (横浜国立大学) |
| 5) 平成17年度事業予算案 | 青山 浩之 (横浜国立大学) |
| 6) 役員改選について | 野中 浩俊 (新潟大学) |
| 7) 紀要について | 横田 恭三 (跡見学園女子大学) |
| 8) 日本学術会議東洋学研連について | 横田 恭三 (跡見学園女子大学) |
| 9) 次年度開催校挨拶 | 風岡 正明 (愛知教育大学) |
| 10) 新入会員紹介 | 事務局 |
| 11) その他 | |
| 5、閉会の言葉 | 竹之内裕章 (佐賀大学) |

10:00 研究発表〔1〕(3分科会)

【第1会場】(3件) 司会 横田 恭三 (跡見学園女子大学)

【第2会場】(4件) 司会 柿木原くみ (相模女子大学)

【第3会場】(4件) 司会 大橋 修一 (埼玉大学)

発表1 10:00～10:30 発表2 10:30～11:00

発表3 11:00～11:30 発表4 11:30～12:00

12:00 昼 食

13:00 記念講演

「出土文字を観る」 平川 南 先生 (人間文化研究機構理事、国立歴史民俗博物館館長)

14:40 研究発表〔2〕

司会 鶴田 一雄 (新潟大学)

発表1 14:40～15:10 発表2 15:10～15:40

15:50 分科会報告〔研究発表1の各分科会司会者による〕

16:20 閉会の言葉 大橋 修一 (埼玉大学)

研 究 発 表

平成17年度 千葉大会 発表題目および発表者

〈研究発表1〉

第1会場

1. 法律文書に見る秦・前漢時代の書美・書風に関する一考察

新潟大学大学院生 堀川千夏子

2. 開通褒斜道刻石の考察―簡牘との比較を通して―

帝京大学講師 岡本 直人

第2会場

1. 平安期のかな書に見られる表現意識に関する一考察

横浜国立大学大学院生 馬場 美幸

2. 藤貞幹の日本古代印研究―『公私古印譜』を中心として―

立教新座中学校・高等学校講師 杉山 勇人

3. 日下部鳴鶴の実像

新潟大学助教授 岡村 浩

第3会場

1. 何紹基の書法観―「臨金文卷」を中心に考える―

新潟大学大学院生 西 絵里子

2. 「伝西行筆」の古筆の享受―極札等の鑑定の記録を中心に―

広島大学大学院生 塩出智代美

3. 視覚実験による字座の異方性に関する考察

名古屋市立大学大学院生 沓名健一郎

〈研究発表2〉

1. 北魏明元帝子孫系墓誌群の資料的意義と筆跡の類似性に関する研究

愛媛大学助教授 東 賢司

2. 古硯における墨池の様式の変遷

佐賀大学教授 竹之内裕章

平成16年度 全国大学書道学会活動報告書

(平成16年)

- 5月8日 常任幹事会〔平成16年度徳島大会について〕
 5月中～下旬 徳島大会要項（第1次）作成
 6月9日 徳島大会要項（第1次）・紀要・会報・書作品展図録・会員票（はがき）・
 会費振替用紙等送付
 7月1日 本年度大会研究発表応募締切日
 7月中～下旬 発表要旨採否確認
 7月31日 本年度会員書作展作品締切日
 8月上旬 研究発表の許可について通知
 8月中～下旬 会員名簿作成
 8月25日 常任幹事会〔徳島大会について・研究発表順、会場設定について・
 総会議事案について・第19期日本学術会議東洋学研連の活動について〕
 9月9日 徳島大会要項（第2次）・発表要旨集・会員名簿等送付
 10月8日 幹事会〔徳島大会総会議事検討〕
 10月9日 書道三学会合同懇親会
 10月10日 平成16年度徳島大会〔総会・研究発表・講演〕
 10月8～12日 平成16年度会員書作展
 10月中～11月中旬 研究発表論文査読

(平成17年)

- 1月～2月 紀要編集
 2月5日 常任幹事会〔徳島大会反省・次年度千葉大会日程について〕

平成16年度 全国大学書道学会決算報告書

A・〔収入の部〕	
1) 平成15年度からの繰越金	2,015,415円
2) 平成16年度会費収入	1,524,000円
合 計 (A)	3,539,415円
B・〔支出の部〕	
1) 総会運営費	120,000円
2) 幹事会費	456,944円
3) 通信費	246,585円
4) 会員書作品展図録代	360,220円
5) 研究紀要代	325,815円
6) 事務費	85,106円
7) 慶弔費	7,232円
合 計 (B)	1,601,902円

(A) 総収入－(B) 総支出＝ 残 高

3,539,415 － 1,601,902 ＝ 1,937,513 円（次年度繰越金）

上記の通り報告いたします。

平成17年9月21日

全国大学書道学会

監査

前田舜次郎

会計

青山 浩之

平成17年度 全国大学書道学会活動計画

(平成17年)

- 3月31日 常任幹事会〔平成17年度千葉大会について〕
 4月中～下旬 千葉大会要項（第1次）作成
 4月29日 千葉大会要項（第1次）・紀要・会報・書作品展図録・会員票（はがき）・
 会費振替用紙・会員書作展要項等送付
 6月中旬 会員名簿整理
 6月15日 本年度大会研究発表応募締切日
 6月中～下旬 発表要旨採否確認
 7月3日 常任幹事会〔千葉大会について・研究発表者及び発表順・会場設定・
 総会議事案・役員改選・日本学術会議東洋学研連の活動等について〕
 7月上旬 研究発表の許可について通知
 7月25日 本年度会員書作展作品締切日
 7月31日 千葉大会要項（第2次）・発表要旨集送付
 9月20日 幹事会〔千葉大会総会議事検討〕
 9月21日 平成17年度千葉大会〔総会・研究発表・講演〕
 9月22日 書道三学会合同懇親会
 9月21～23日 平成17年度会員書作展
 9月下～11月上旬 研究発表論文査読

(平成18年)

- 1月～2月 紀要編集
 3月中旬 常任幹事会〔千葉大会反省・次年度愛知大会日程について〕

平成17年度 全国大学書道学会予算

A・〔収入の部〕	
1) 平成16年度からの繰越金	1,937,513円
2) 平成17年度会費収入	1,800,000円
合 計 (A)	3,737,513円
B・〔支出の部〕	
1) 総会運営費	150,000円
2) 幹事会費	450,000円
3) 通信費	250,000円
4) 会員書作品展図録代	360,000円
5) 研究紀要代	400,000円
6) 事務費	150,000円
7) 予備費	1,977,513円
合 計 (B)	3,737,513円

日本学術会議 東洋学研究連絡委員会報告

平成一七年度東洋学研究連絡委員会関係の主な活動を報告致します。

六月一日

第一回東洋学・アジア研究連絡協議会総会（会場 東方学会会議室）

〔会員〕二三名（学協会二四）、〔オブザーバー〕一名（一学協会）、

〔事務局〕東方学会三名、計二七名の参加を得て開催。

議事 1、会則制定について（学会紀要112頁参照）

2、学術会議の動向について

九月二四日

十時〜十二時三〇分

東洋学研究連絡委員会（会場 東京大学）

議題

1、報告事項

（a）連絡部会の報告

（b）第一部会の報告

（c）総会（八月三〇日・三一日）の報告

（d）東洋学・アジア研究連絡協議会第一回総会の報告

（e）科学研究費「グローバル化とアジア」の進捗状況の報告

（f）その他

2、審議事項

（a）シンポジウム「アジア人間科学への道―東洋学とアジア研究―」について

- （b）「東洋学研連ニューズレター第四号」について
- （c）「第一九期議事要旨」の公開について
- （d）その他

十三時〜十七時

シンポジウム

「アジア人間科学への道―東洋学とアジア研究―」（会場 東京大学）

主催・日本学術会議第一部東洋学研究連絡委員会

・財団法人東方学会

・東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所共同
研究プロジェクト「総合人間学」

提題

1、大橋一章 「仏教美術の伝播―中国・朝鮮・日本―」

2、蓑 豊 「オリエントとは何か」

3、小松久男 「中央ユーラシア研究の眺望」

4、石井米雄 「東洋学と地域研究」

5、内堀基光 「アジアにおける民俗学と人類学―東南アジア島嶼部を中心として」

6、藤井正人 「総合学としてのインド研究のあり方を探る―王権・儀礼をテーマとして」

*なお、詳細についてお知りになりたい方は、東洋学研連委員の横田までメールをお送り下さい。わかる範囲でご回答致します。

Eメールアドレス yokota@atomi.ac.jp

平成十七年度 全国大学書道学会

新入会員

幕田 隆

千葉大学非常勤

新入準会員

坂井 昭彦

新潟大学大学院

大滝 英輔

淑徳大学大学院

菊地 彩子

武蔵野大学大学院

高口 盛幸

四国大学大学院

小竹 正高

四国大学大学院

櫻木 享子

四国大学大学院

佐々木 肇

四国大学大学院

清水香代子

四国大学大学院

鈴木龍之介

四国大学大学院

事務局

〒240-8501 神奈川県横浜市保土ヶ谷区常盤台79-2

横浜国立大学 教育人間科学部

国語・日本語教育講座 青山（書道）研究室内

全国大学書道学会

新入会員推薦のお願い

会員の先生から、新入会員・準会員をご推薦いただき、さらに本会の充実を図りたいと考えております。「規約」と「新入会員用会員原票（入会申込書）」をとじておきましたので、よろしくお願いいたします。

※「新入会員用会員原票（入会申込書）」に記入の上、事務局（下記所在地）まで郵送してください。

※年会費は、会員6,000円・準会員5,000円です。なお、大学院修了後は、会員の資格として扱います。

送金は、必ず郵便振替（青色用紙）をお願いします。（用紙の通信欄に、「新入会員」もしくは「新入準会員」と明記してください。）振込先は下記の通りです。

■口座番号 00110-9-613810

■加入者名 全国大学書道学会

平成18年4月1日より事務局が変更になります。

〈新事務局〉〒184-8501 東京都小金井市貫井北町4-1-1

東京学芸大学 教育学部 美術・書道講座

石井 健 研究室内

TEL/FAX 042-329-7611

全 国 大 学 書 道 学 会

----- キリトリセン -----

全国大学書道学会 新入会員用会員原票（入会申込書）

〔 会員・準会員 〕 どちらかに○

会員番号 ※ —

都道府県名	※平成 年 月 日 入会	
ふりがな	ふりがな	
氏 名	印	雅 号
生年月日	(明・大・昭 年 月 日生 男・女)	最終卒業校
勤務先	職 名	
勤務先 所在地	〒	電話番号（下段はFAX） () — () —
現住所	〒	電話番号（下段はFAX） () — () —
帰省先 (大学院生の方)	〒	電話番号 () —
推薦者（会員） 及 び 推薦理由		
〔規約第2条に定めた資格に該当するもの（大学教員等）は、記入不要〕		